教職科目 B，社会科（地理歴史科）教育法Ⅰ
担当教員：福田　喜彦

「社会科（地理歴史科）教育法Ⅰ」でのＦＤ活動への取り組み

社会科教育講座・福田　喜彦

１．本授業の目的とその概要

本授業は，中学校（社会科）・高等学校（地理歴史科）の教員免許状取得に必要な科目であり，中学校社会科（地理的分野・歴史的分野），高等学校地理歴史科の歴史，内容構成，授業構成について理解することを目的としている。そのため，本授業では，到達目標として，以下の３点を設定した。①中学校社会科，高等学校地理歴史科の歴史や内容を説明することができる，②中学校社会科，高等学校地理歴史科の授業を分析，評価することができる，③中学校社会科，高等学校地理歴史科の実践上の諸問題について，自分の考えをまとめ，論述できる。こうした目標を達成するために，本授業は以下のような形で授業を進めた。前半では，社会科教育学の視点から社会科教師に求められる資質や能力，新しい学習指導要領の内容を解説し，これまでの理論的な研究成果を踏まえた社会科授業の原理について考察した。中盤では，愛媛県における社会科教育の現状と課題を実地指導講師（中学校教員）の講義を通して学習した。それによって，社会科授業の実践上の課題や授業作りのポイントを教育現場の視点から検証し，教材研究や授業実践に生かすことができるようにした。そして，後半では，理論的・実践的な立場を総括しながら，学生たちが主体的に教材研究や学習指導案づくりに取り組むことで，よりよい社会科授業を構想し，授業展開ができるようにした。

２．小レポート課題の設定とテーマへの理解度

本授業では，社会科の授業デザインができるように様々な課題を設定してテーマへの理解度を図っていった。本授業で取り上げた小レポート課題の解答からいくつかの事例を考察してみたい。

Ａさんは歴史の大きな流れの理解の重視について中学校社会科の学習指導の特色を述べている。「時代の大観を口述させる活動を行わせたが，その際念頭に挙がったのが，その時代を決定する要因とは何かということであった。世界の歴史を背景としてそれを理解し，次点に伝統・文化への考察に移るため，暫定的に政治社会の側面が主軸に捉えられているものと考えたが，「歴史」の「大きな流れ」を，無前提にその観点から構成するものとする見方については疑問に残った。」（法文）

Ｂさんは，「地域的特質」の２つの視点から中学校社会科地理的分野の学習内容を捉えている。「日本の諸地域も世界の諸地域も，「地方的特殊性」と「一般的共通性」を中心に指導を行っている。「地方的特殊性」は「その地域に限ったこと」，「一般的共通性」は「全体的にみられること」。この二つの目線を使って地域を見ていくことで，地域の特徴をより理解できると思った。」（教育）

Ｃさんは，学習目標に到達できる授業計画という視点で中学校社会科の学習指導を捉えている。「一つの授業の中では，もちろんその授業で到達してほしい学習目標がある。それを軸として授業計画を練らねばならない。生徒たちが興味を持ち，楽しく進められる授業も大切であるが，一番大事なのは，伝えたいこと，理解してほしいこと，学んでほしいことが，生徒に届いているかどうかであると思う。」（法文）

Ｄさんは，社会科の学習指導で取り扱う資料という観点から，社会科の授業の特色を考えている。「大学に入ってからも社会の授業では様々な資料が扱われていた。例えば，その授業内容に関する新聞記事であったり，火山の噴火の映像などを扱ったNHKの映像資料など様々なものが用いられていた。それは私自身も強く共感し，自分がその授業に入りやすかったように，生徒も同じだと思うため，資料の工夫は大切であろう。」（教育）

小レポートのなかでは，実地講師の話をもとに，社会科の学習指導の特色を，これまでの社会科授業体験から再構成し，社会科の授業で求められる教師としての資質や能力はどのようなものかを自分なりの視点で捉えていた。このようなアクティブ・ラーニングは有効であったと考えられる。

最後に，こうした課題を省察し，最終レポート課題では，本講義の内容をふまえて，各自で新たなテーマを掲げた社会科学習指導案を作成した。

３．本授業に対する学生の意見と改善への視座

本授業を受講した学生からは次のような意見が出された。以下，いくつか事例をあげてみたい。

「このレポートを書いてみて，気づいたことは，教科書以外にも，なにか資料提示を行うことで授業内容が大きく膨らむことだ。教科書だけで考えた指導案では，なんとなく薄っぺらい授業のような印象になってしまい，語彙や知識だけを教えているようなものになってしまいました。しかし，今回取り入れた，『子どもたちの 3･11 東日本大震災を忘れない』や『読売新聞特別縮刷版東日本大震災１か月の記録』や『まつやま私たちの防災マップ』などを資料提示することで，単元内容が生徒自身の身近に近づいた授業展開になった気がした。よって，どのような分野でも，常に日頃から資料となるようなものはないかという視点で生活することが必要だと考えた。講師の先生が，資料はそこら中に転がっているとおっしゃっていたことを思い出した。このような視点をもちながら，生活するようにしたいと考えた。」（教育）

「指導案は砂漠地帯や熱帯雨林帯の地域性に絞った地誌的な学習ではなく，それらの事象に対する法則性の理解を目的とする系統地理学の学習でもない。どちらかというと水資源を軸にして環境問題について学ぼうとしているのでテーマ地理の学習の要素が強い。しかし，学習指導案を作り，授業の流れを見てみると地理の授業というよりは公民の授業の要素が強くなってしまった。これは社会科教育の構造が地理，歴史の概念を踏まえた上で現代社会の諸問題に主体的に取り組む資質を育む教科であり，各分野が密接にかみ合う以上，やむを得ないことかもしれないが，自分で作った指導案でありながら少し違和感を覚えてしまった。（中略）しかし，その一方で暗記主体の地理の授業が批判を浴びてきた経緯を考えると知識偏重の授業も展開するべきではない。学習者に関心を持たせることに力を入れるとこの知識の部分が疎かになり，かといって知識注入に力を入れると暗記科目になってしまう。この両立の難しさを今回の課題を作りながら実感した。」（法文）

「社会科教育法の指導案を作成して，三点のことが心に残りました。第一に，生徒たちの興味関心をひきつける教材選びの大変さです。今学期の同じ課題で初等生活科教育法のレポートを私は書きました。そこでは，あまり枠組みに縛られずに自由に教材選びができ，遊びや探検活動の体験活動を通して児童たちの興味関心を引き出していました。しかし，社会科教育法の指導案は，指導する単元や枠組みがある程度決まっており，興味関心を引き出すのに苦労しました。私は，身近な生活と関連づけたり，リーマンショックと産業の空洞化との結びつけなどを取り入れましたが，新聞記事やニュースを取り入れるのもよいと思いました。また，時間やお金があるなら出かけて体験活動を取り入れるとよいと思いました。第二に，評価の難しさです。一回の授業で生徒たちをどのように評価するかを決めることが難しかったです。私はワークシートを利用した社会構造分析の学習成果と学習への意欲を評価の対象としました。この時間外でテストを行うとするなら，評価の観点も広がり，より多角的な方向から評価ができると思います。」（教育）

「私がレポートを作成していて最初に思ったことは，自分の作成しているレポートの内容が今まで受けてきた小・中・高の授業の内容に被る部分が大きいことだ。しかし，大きくかけ離れていると思った点は毎授業ごとに指導案で作成したような授業を実行している授業はないことだ。今まで受けてきたあらゆる科目の授業において，毎時間グループワークをしたり討論したりする授業はなかった。一方で，それは公教育という場面において全体の利益を考えたときに毎時間それを行うことは望ましくないのかもしれない。それならば，本講義で扱ったような指導案を書くことは惰性に従った授業構成である可能性が高い。この指導案が活躍する場面は，参観授業か公開授業の場面のみであろう。ここで注意しなければならないことは，指導案自体は重大な意味のあるものでその内容を十分に吟味しなければいけないということだ。（後略）」（法文）

「社会科のレポートを作成してみて，授業を考えるということは自分が想像していた以上に難しく，時間がかかるのだと思った。使用する教材一つにしても，こういう学習効果があるから使う，という明確な意図を持っていないといけない。そしてそれは，すべて生徒自身の学習につながっていて，非常に責任重大なことなのであると気がついた。教師という仕事の重みを再認識することができた。」（教育）

４．本授業の総括と次年度へ向けた課題

学生らは講義や演習を通し，社会科教師としての資質や能力とは何かを追究することができた。

以上，学生から出された意見も踏まえ，新たな知見が提供できるよう今後も授業を改善したい。